

英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol. 66 No. 2 2014

主幹 新里 眞男

巻頭言

ストーリー性のある授業デザイン

秋田大学教授 ● 佐々木 雅子

昨年は「授業力を高める事業」(秋田県)の一員として多くの授業を参観する機会を得た。よい授業であると感じさせる授業には共通した特徴がある。それは、「いつのまにか言語習得が起こる授業」である。そしてそこにはストーリー性がある。

幼いころ、日本の昔話やイソップ、グリム、アンデルセンなどの童話を読み、感情を揺すぶられた経験をお持ちの方は多いと思う。時に心温まり、時にどんでん返しに驚き、そして、時にエッセンスとしてもたらされる教訓に気をひきしめるなど、思い出はさまざまであろう。また、不思議なことに長い年月を経ても話の内容は忘れていない。必死になって一字一句暗記したわけでもないのに、ことばが自然に紡がれて出てくる。なぜだろう。おそらくそれは、夢中になったストーリー性に帰因するのではないか。巧みなストーリー性が、話の内容をことばに乗せて順に表現することを容易にするのだと思う。すなわち、ことばの意味、形式、用法がストーリー性によって束ねられ、セットとなって長期的に記憶されるからではないだろうか。

これは授業デザインのヒントになる。ストーリー性を意識して授業をデザインすることは言語習得を促進するうえで重要だ。「最低限これだけは覚えなさい」と指導された基本文の内容に一貫性がないため暗記しにくいと感じた生徒が、「基本文どうしが意味的につながって流れていたらいいのに」と口にしていたという話を聞いた。意味のあるストーリー性が記憶の負荷を軽減することで目標となる文法事項に、より強い注意を向けられることを感じて訴えたものと解釈できる。また、「私たちの先生はwitchだ。いつのまにか乗せられている」という生徒にも出会った。この先生の授業では自然なインタラクションが多く観察された。英語を使っているうちに英語を覚えていく、つまり、いつのまにか言語習得を起こしてくれるらしい。witchの魔法を思わせるような、言語習得を起こす授業力を身に付けた教師には何が備わっているのか。そのひとつは「ストーリー性のある授業デザイン」であるという直感を強く持った。今年は言語習得が「目的」ではなく「結果」として出てくるような授業に多く出会いたい。



より意味のある練習活動を目指して

東京国際大学准教授 松林 世志子



1. はじめに

文部科学省は昨年12月13日に、中学の英語の授業は英語で行うことなどを盛り込んだ「英語教育改革実施計画」を発表した。小学校5年生から行っている現在の外国語活動を小学校3年生からに早め、5年生からは英語を正式教科にするという。中学校の英語の先生方は、小学校と高校の英語の先生方をつなぐ、「扇の要」のような存在として、地域での活躍が期待されている。英語が使えるようになるには、学んだ文法などの知識が知識のままではなく、実践的に使える能力になっていなければならない。そのためには、練習活動をどう行うかが鍵となる。

2. 練習するということ

英語ができるようになるには、スポーツや楽器の練習からヒントを得ることが多い。スポーツや楽器の練習なら、学習者自身にも体験があり、理解しやすいだろう。「どうやって(得意なスポーツ、楽器などが)上手になったの?」と聞いてみると、「毎日たくさん練習したから」と答える生徒が多いのではないだろうか。英語も同じで、英語ができるようになるためにはたくさん練習することが最も大事であることを、学んでいる本人にも理解させると、意識的に練習するようになるのではないだろうか。ここでは、授業中に行う練習活動で、教師が気を付けておくべきことを3つ挙げる。

(1) 練習の量を確保する

「たくさん練習すること」の大事さを教えるのに、授業中に練習する体験を生徒にさせるのがいちばんよいが、一斉授業で一人ひとりが練習できる時間を確保するのは難しい。全員で言わせて練習する活動だけでは、同じ文をくり返し言うだけで、使ってみる体験をさせられない。指名して言わせる方法では、指名された生徒だけが練習できて、ほかの生徒たちは他人の練習を見ているだけである。すばやく挙手させて発言させる方法で、あたかも教師と生徒たちで対話するように授業を進められたらよいが、1対30人以上の生徒との対話では、ずっと黙っている生徒も出てきてしまう

だろう。

一人ひとりの練習量を確保するのによい方法は、ペアワークやグループワークの活用である。SunshineのBasic Dialogに出てくる文法項目は、見開きのページの背景に薄い色を付けて目立たせている箇所練習できるようにしている。Listeningで最低3回、学ぶべき文法項目を文脈の中で聞いたのち、言う活動(Speaking)や対話する活動(Let's Try)をペアやグループで練習させることで、指名された生徒だけが練習するのではなく、全員が練習できる。正しく言えたかどうかを、常に教師に見てもらおうのではなく、peer(同輩)で教え合い、友だちと情報交換をしたいと思うようなクラスの雰囲気作りが必要になるだろう。また、確認のために数人を指名して言わせてみると、最後に、プラスアルファで教科書に載っていない、確認のための問題を加えると、新しく学んだ文法項目が別のコンテキストでも使えるようになったかを確認することができる。練習の量を多くし、練習により身に付いたかどうかを確認しながら授業を進めたい。

(2) 練習の質を考える

文法を教えるときに、大まかに2通りの練習方法がある。1つは、mechanical practice(機械的なドリル)であり、口慣らしなどにより、教えようとしている文法の形を練習するものである。モデルのあとについて言う反復練習、文の中の一部を変えて別の文を作るsubstitution drillや、穴埋め、並べかえなどの書いて覚えるドリル形式のものも機械的な操作が多い。もう1つは、meaningful practice(意味重視の練習)であり、information gap activityのように、コンテキストの中で意味を考えながら、学んでいる文法項目を何度も練習するものである。どちらも、学んでいる文法を何回も使って練習するのがポイントだ。意味を考えないで、機械的に操作できるドリル形式の練習では、「問題に答えられた」という喜びは味わえるが、「英語で通じた!」という喜びを味わうことができない。練習を多くさせる中で、機械的な練習だけに終わらないように練習の質を考えてバランス

よく練習をさせることを意識すべきである。

たとえば、can(肯定文、否定文、疑問文)を教えているときに、下の①のような練習は、canを使うときの語順をくり返し練習することができ、「文法が理解できた」という気にはなるが、「英語で自分のことが言えた」という達成感はないだろう。

①日本文の意味になるように、()の中の単語を並べかえて正しい文にしてください。
「私は泳げます。」(swim / I / can).
「私はゴルフができます。」(golf / can / play / I).

正しい語順で言えることは、英語の基礎力につながる。しかし、このような練習だけで終わってしまうと、英語を使ってコミュニケーションをする楽しさを教えることができない。下の②のように、自分について言いながら、正しい語順でくり返し言う練習はできる。

②空欄にcanかcan'tのどちらかを入れて、自分について言ってみましょう。
I () swim.
I () play golf.

練習用の文を多く用意すれば、自己表現できることが広がり、学びたいという意欲につながるだろう。

しかし、②の練習方法は、もともと与えられた文について反応しているだけで、自分から表現しようとしているわけではない。下の③のように20 Questions (Yes-No Questionsで聞く)の形式を使い、communicative activityを行うと、学んでいる文法項目を、意味を伝えるために何度も使う練習になる。

③一人が有名人や人気のキャラクターになりきり、ほかの生徒から受けるcanを使った質問に答える。ほかの生徒は質問をしながら、だれのことを当てる。(e.g. Can you sing? Can you fly?)

クラス全体で一度例を見せたのちに、4~6人1グループで行えば、より一人が発言する回数が増える。

上に挙げた①はmechanical practiceである。このような練習は、形を覚えるのに役立つ。口頭練習と書く練習のどちらのアウトプット練習もほしい。しかし、このようなmechanical practiceだけで終わらせずに、生徒自身について言ったり、書い

たりする体験をさせたい。②のような自分について答える練習は、無味乾燥に見えた文法が、自分との関連で意味づけられること(personalizing)で、「こうやって使うんだ!」という体験とともに記憶に残りやすい。

また、練習は、おもしろければ何度やっても飽きない。おもしろさを引き出すには、1つは、上に挙げたpersonalizingであるが、もう1つは、ゲーム性を持たせることである。たとえば、willを使った練習では、生徒がよく知っている物語(『ごんぎつね』、『桃太郎』など)を教師が英語で話し始め、What will happen next?と聞けば、ストーリーを知っている生徒は、(willを使って)話したくなる。しかし、ほかの生徒に遠慮して黙っているかもしれない。チームで競い合う形でゲーム性を持たせれば、「遠慮する」空気から、「参加する」空気に変えることができる。

ゲーム性のあるcommunicative activityは、ほかの先生方も挑戦しており、いろいろな本や研究会で紹介されている。実際に教室でやってみて、うまくいったら、それをその文法を教えるときのレパートリーとして蓄積していくとよい。Penny Ur著 Grammar Practice Activities (Cambridge University Press)は、さまざまなレベルを対象にしているが、初級のものも多く載っている。また、練習のさせ方についてのヒントが得られるので、おすすめの本である。

(3) 成功体験の積み重ねになるように練習させる

練習は、正しいことのくり返しであることを忘れてはならない。「合っている」を何度もくり返したから「わかった!」というのが練習である。間違っていることをくり返したら練習にならないどころか、できるという感覚が得られず、自信を失うかもしれない。練習はテストではないので、間違いから学ばせる必要はない。間違いから学ばせるのは、テスト勉強であって、練習ではない。練習は正しい形をくり返し使い、慣れさせることである。それぞれ教える段階の目的に合った方法で練習をさせなければならない。

参考文献

Ur, P. (2009, 2013). *Grammar Practice Activities*. Cambridge University Press.



冠詞の理解、定着を目指して

静岡県沼津市立第三中学校教諭 本田 美智子



1. はじめに 生徒の実態

私は今年度1年生と2年生の教科指導を担当しています。静岡県沼津市では、平成18年度より言語科が始まり、小・中全校にALTが配置されています。現1,2年生は小学校1年生からその恩恵に浴し、週に一度ネイティブスピーカーと接しています。そのため、英語を使ってコミュニケーションを楽しもうとする生徒が大勢います。

反面、中学校入学時から英語に苦手意識を持つ生徒もいます。入学時から意欲に差があり、あきらめがちな生徒が各クラスにいます。1学期が終わるころ、塾に通う生徒とそうでない生徒との差は感じられませんが、あきらめがちな生徒とは差がありました。

2. 日本語にはない冠詞の理解

あきらめがちな生徒にとってボトルネックだと思われるのが文法理解です。従来の黒板に書いて説明する文法指導、3,4回単語を置きかえるパターンプラクティスでは、今一つ使える言語材料にはならないような気がしていました。

特に1学期中間テストの結果、冠詞aの理解が不十分だと感じました。2年生の英作文でも、冠詞aが抜けたり、付けなくてもよいKyotoにtheを付けてしまったり…。可算名詞、不可算名詞の概念がない日本人にとって、名詞に冠詞を付けることは理解し難いのかかもしれません。音読時に冠詞は弱勢となることも、冠詞が定着しにくい理由の1つだと考えられます。冠詞aはSunshineでは、Program 2-1が初出ですが、単元を中心となる言語材料ではありません。そこで毎日の帯活動として、冠詞の使用場面を身に付けられる練習活動を考え、実践しました。

3. 準備物：名詞フラッシュカード

①15程度の名詞をフラッシュカードに書く。

- ・aを付けるもの：book, studentなど
- ・冠詞の不要なもの：Englishなど教科, Yukiなど固有

名詞, tennisなどスポーツ名, waterなど不可算名詞
・anを付けるもの：egg, elephant, MD, English bookなど母音で始まる名詞
・裏には、適する冠詞と名詞を書く。
※人名は教科書の登場人物とし、未習語には簡単な絵を添えた。

- ②クラス全体に提示し、冠詞を付けてその名詞を発音するよう指示する。意見が割れたものは、「なぜこの場合はa～なんだろう?」と問いかけ、理由を考えさせる。
- ③再度カードを提示して、「冠詞+名詞」の発音練習をする。

4. 対戦型冠詞トレーニング

- ①集団を2つに分けて、教卓前に1チーム1列になって並ぶよう指示する。
 - ②列の先頭にいる2人に、カードを1枚提示する。生徒はふさわしい冠詞を付けて名詞を言う。
 - ③早く正解を言うことができた生徒は、自分の席に座る。負けた生徒は自分の列の最後尾に並び、もう一度対戦する順番を待つ。
 - ④並んでいる生徒がいなくなり、早く全員自分の席についたチームの勝ち。
- ※最初の1,2回は、対戦前にフラッシュカードを提示し、全員で練習し、答えを確認する。

5. 生徒の様子と効果

(1) あきらめがちな生徒の声

上記のやり方で、期末テストまでの1か月間、授業の序盤に実践してみました。3回目、カードを見せるだけで、生徒たちが「あの対戦をやるんだ!」と机を左右に移動させ、1列に並び始めました。苦手意識を持っている生徒や、あきらめがちな生徒も、「また、(この活動が)やりたい!」と言うようになりました。

(2) 意欲を生む要因

①ゲーム要素とシンプルさ

あきらめがちな生徒でも、意欲を持てる要因とは何だったのでしょうか。1つにはゲームの要素が挙げられるでしょう。しかも、ルールがわかりやすく、シンプルなゲームであることが肝要です。

最初の1,2回は、カードの答えを全員で確認しました。モデル化を行ったうえで対戦を行ったので、あきらめがちな生徒でも、意欲を持ってできたのではないのでしょうか。

30人学級を2チームに分けて行くと、7,8分で勝敗が決まります。発達障害を持つ生徒にも、集中力を保つことのできる時間です。

②助け合い

英語が苦手な生徒や能力差のある集団には、仲間との教え合い、助け合いのできるペアワークやグループワークが有効です。

活動で使用するカードは15枚なので、1回戦で敗退しても、2回戦で既に出題されたカードに当たるかもしれません。待っている間、ほかの対戦を聞くことが自分の学習にもなります。なぜ冠詞が必要または不要なのかわからなければ、同じチームで勝ち抜けた生徒に聞くなど、生徒どうしのやりとりを促しました。

③逆転現象

英語を得意とする生徒には、論理的に考えて冠詞を判断する傾向があります。また、間違えるのは恥ずかしい、というプライドもあるでしょう。一方、英語を苦手とする生徒は、間違えることを恐れませんが、反復してフレーズの語感を捉え、言語感覚で答えを選択する傾向があるように思います。

回を重ねるうちに、論理的に答える生徒よりも言語感覚で答える生徒のほうが、早く勝ち抜けるようになりました。つまり、逆転現象が生じるのです。「英語の得意な○○さんに勝った!」「すごい。△△君は超早かった!」教室内でそうした歓声が上がりました。

「自分たちにも勝つチャンスはある…」これは、英語の苦手な生徒に励みになったのではないのでしょうか。

④個別支援の機会

勝敗が決まったあとも、並んでいる生徒一人ひとりにカードを提示し続けます。英語が苦手な生徒もいますが、緊張して答えられない生徒もいます。ゲームだけではなく一人ひとり落ち着いて考える時間やチャンスを保障することも必要です。論理的に考えてふさわしい冠詞を付けられたことを褒め、励ました。

(3) 効果

1学期の期末テストまで1か月程度、この練習

活動を帯活動として実践しました。期末テストまでに、定冠詞the, 所有格my, 複数形が登場し、生徒に混乱が予想されました。そこで、15枚のカードにそれらの言語材料に対応した名詞も加えました。すると、期末テストで、冠詞に関するエラーが減りました。特に定冠詞theに関するエラーは数えるほどでした。使用場面を感じながら冠詞を付ける練習を行ったこと、また、仲間と楽しみながら反復練習を行ったことが、よい効果を生んだと自負しています。

6. 課題と発展

この練習活動には、2つ問題点があります。1つ目は、15程度の名詞に冠詞を付けるだけの単純な反復練習だという点です。ふさわしい冠詞を付けることができても、それを応用してほかの名詞にふさわしい冠詞を付けることができなければ、意味がありません。単なるインプットから自己表現のアウトプットにつなげたいものです。新出単語を学習したとき、辞書で可算/不可算を確認させたいので、適切な冠詞を確認する必要があるでしょう。あきらめがちな生徒だけでなく、英語を得意とする生徒の知的好奇心を満たすような練習活動にもつなげていきたいものです。

Sunshineの教科書本文は、背景や状況を示唆する冠詞の用例が豊富です。日本語には表れないような背景や状況を、冠詞について発問することで解きほぐすことができるでしょう。たとえば、1年生のProgram 7-1では、マイクが由紀に“Who's the girl?”とたずねます。由紀の持っている絵本に描かれた女の子を周りのみんなが認識できていることがわかります。2年生のTeacher's Book (Program 6-1)には、定冠詞theについての発問が載っています。Program 9-1では“... he went to see the local priest ...”という表現が出てきます。Sergioが見ず知らずの神父を訪れたのか、昔から知る神父に救いを求めたのかを考えさせるのも興味深いでしょう。

2つ目は、マンネリ化に陥る可能性がある、という点です。マンネリ化防止のため、定冠詞を付けるべき名詞、所有格を付けるべき名詞、固有名詞を織り交ぜました。スパイラル式に既習事項を発展させています。また、毎回行うのではなく、テスト前に復習として行うなど、活動の頻度についても工夫していきたいと考えています。



教科書を生かした自己表現活動

福岡県柳川市立三橋中学校指導教諭 今村 隆徳



1. 自己表現活動は何のため?

私はこれまで約30年間英語を教えてきました。この中で自己表現力育成の大切さを痛感した出来事が2つありました。1つは、練習問題などはたいへんよくできる生徒がハワイのホームステイから帰ってきて、開口一番次のように私に言いました。「先生、教科書を全部覚えていったけど英語全然話せんかった」と。これには私もたいへんなショックを受けました。そしてもう1つは単語を暗記することは苦手だが、たいへん元気のある生徒から「先生、自己表現の活動は楽しかばい。自分の言いたいことが英語で書いたり言ったりできるけん」と。この2つは何を意味するのでしょうか。初めの生徒のことは、私が教師になりたてのころ、パターンプラクティスで生徒を鍛え、文法問題を毎時間させ、教科書の暗唱をよくさせていたころのものです。また、教科書どおりに寸劇をさせたりもしていましたが、自分の考えを持たせたり、それを英語で表現し、人に伝えたりするという自己表現活動やリスニング力をつける指導が不足していたことに気付かされました。

2つ目の生徒のことは、自己表現活動を取り入れたあと経験したものです。単語の暗記が苦手でも、だれもが自分の考えやさまざまな生活体験を持っているので、それを和英辞書などを使って英語で表現し、褒められるという体験をくり返せば、やる気を引き出すことができるということに気付かされました。もちろんこの自己表現活動が成立するためには、教師と生徒、生徒どうしの信頼関係が必要です。みんながきちんと人の話を聞き、発言を嘲笑したりするような生徒が一人もないことが理想です。しかし、荒れた学級でも少しずつ自分の考えを書かせたり、言わせたりすることによって互いのことを知ることができるようになれば、きっと授業の雰囲気や人間関係が変わってきます。また、英語が苦手な生徒も、文法的に多少ミスしても、語順さえ正しければ、内容で勝負できるという利点もあります。このように自己表現活動はだれにでも活躍できるチャンスを与え得る活動だと思います。

2. 教科書を使った自己表現活動(実践例1)

《Sunshine 1アクションタイム全員集合の活用》

このページには30の命令文とその中に27の動詞が使われています。ここを初めて見たときは、中学1年生のProgram 3のあとというこんな早い時期にこれほど多くの動詞を一度に出すことは、生徒にとって負担が大きすぎるのではないかと感じていました。しかし、これらの動詞の半分以上は小学校での外国語活動で慣れ親しんだことがあり、音声と動作で十分理解することが可能でした。そこで、これらの動詞と表現を徹底して活用することにより、後にいろいろな自己表現活動に生かしていきました。以下は中学1年での活用例です。

①<中学1年2学期に10文スピーチをしよう>

30の命令文の文頭を小文字にしたものをラミネートし、裏にマグネットを付けて黒板に貼る。

これにIを付けていけば30の自己表現文の例文ができ、この中から10文選んで、一部を修正すれば10文スピーチが完成する。この活動に興味を持った生徒は、これに時間や場所をつけて30文スピーチを作った。

②<Doを使って10文以上質問文を作り、質問しよう>

これも同じように、30の命令文の中から10文選び、文頭にDo youを付けて一部修正することにより、質問したい文を作らせることで、コミュニケーション活動に活用できる。

③<Does+友人名を使って10文以上質問文を作り、友人についてのクイズを作ろう>

これも同じように、文頭にDoes+友人名を付け、友だちについてのクイズを作らせた。

このようにしていけば、中学1年3学期では過去形、中学2年では未来表現、不定詞など、さまざまな自己表現活動に利用できる。これができるようになれば30文日記やスピーチも夢ではない。現在、中学2年の3学期では「規則動詞・不規則動詞100+」というプリントを作り、自己表現の幅をさらに広げている。また新出動詞を増やして帯学習(日⇄英)にも活用している。

3. Sunshine 1(My Project 1, 3)を活用した自己表現活動(実践例2)

《生徒のスピーチを活用した対話活動》

About my winter vacation

- ① I went to the AKB48 concert in winter vacation.
- ② I love AKB48 very much.
- ③ Because they are cute.
- ④ They can sing and dance very well.
- ⑤ I will go to the concert again.

これは中学1年生の3学期のスピーチです。これを聞いたクラスの友だちは、心の中で「この人もAKB48が好きなんだ」とか「AKB48の中でだれがいちばん好きかな? 何の歌が好きかな? CD何枚持っているのかな?」など質問したいことがいろいろ浮かぶかもしれません。しかし、一人ではなかなか英語で質問するのは難しいと思います。そこで4人グループやペアで質問を考えさせ、ミニホワイトボードに書かせて黒板に貼らせます。時間内にいくつ質問を作れるか、班で協力して質問を出させることによって個人色が薄まり、質問が出しやすくなります。さらに、教師に質問を褒められれば、その生徒は大きな自信を得ることは間違いありません。このとき文法的なミスがあっても、質問内容や態度など評価できる観点はいくらかあります。オーバーに、かつ具体的に褒めることが大切だと思います。このスピーチに対する質問例として次のようなものが考えられます。(Sunshine 1 p.113の応用編)

- ① When did you go to the concert?
- ② Where did you go to the concert?
- ③ How much was the concert ticket?
- ④ Why did you go to the concert?
- ⑤ Who do you like in AKB48 members?
- ⑥ What song do you like?
- ⑦ How many AKB48 CDs do you have?
- ⑧ Can you sing any AKB48 songs?

このようにスピーチのあとにYES/NOや5W1Hの質問をさせることでスピーチをよりinteractiveな活動にもっていくことによって、生徒の対話力もさらに増してくると思います。私は常に黒板の両サイドに5W1Hの疑問詞を貼っておき、質問を

作りやすい環境を作っています。またアクションタイムの動詞、「規則動詞・不規則動詞100+」などは拡大して英語ルームの背面などの、振り返れば見える位置に貼っています。

4. Sunshine 2 Writing 2「ホストファミリーへのメール」を活用した自己表現活動(実践例3)

《あなたの好きな有名人へメールを送ろう》

ここでは冬休みに博子がアメリカにホームステイすることになり、彼女がホストファミリーへ自己紹介のメールを英語で書いて出すという設定になっています。しかし、冬休みにアメリカへホームステイする生徒は本校では非常に少ないので、「自分の好きな有名人へメールを送ろう」という設定に変えたところ生徒の反応もよく、全員がPCルームでメールを完成させ、1冊のメール集まで作ることができました。生徒の作品を紹介します。

Dear Carly Rae Jepsen,

Hello. My name is Ai. Ai means "love."
I'm a Mitsuhashi Junior High School student in Japan. I want to meet you soon. I want to go to your concert. I want to talk with you. I want you to know me well. So let me introduce myself. I play the flute after school. I love English very much. May I ask you some questions? What's your favorite song? Why can you sing very well? Where do you often go shopping? When do you practice singing? How did you become a famous singer?

Thank you for reading my e-mail. I always cheer for you. Please write back to me. See you. Love.

Ai

5. おわりに

これらの「好きな有名人へメールを送ろう」の活動には生徒がこれまでで最も意欲的に取り組んでいて、1つひとつのメールから生徒の気持ちが伝わってきました。これらの自己表現活動の実践と継続が生徒の学習意欲を喚起し、将来自分の考えを外国の人たちに自信を持って伝えることができる日本人の育成につながればと思います。

がんばろう、
小・中連携!



楽しく小・中連携!

石川県金沢市立泉中学校教諭 道下 浩一



1. はじめに

平成32年の東京オリンピックに向け、国際的に活躍できる人材を育成するため、文科省が英語教育の開始時期を現在の小学校5年生から3年生に引き下げ、5,6年生では英語を正式な教科とする方向で検討を進めている。これからますます小学校での英語教育のあり方や小・中連携の持ち方が大事になる。

必要なのはわかるが、小・中連携は難しいということを生方からよく聞く。特に小・中の先生がいっしょに指導案を作って研究授業をしたり、中学校の教師が出前授業をするのは打ち合わせなどの時間がなかなか取れないなどの理由で敬遠される。そこで簡単にできて、しかも楽しい小・中連携の取り組みを紹介したい。少しでも先生方の参考になればと思う。

2. アクションカードを利用して

金沢市では新学習指導要領の施行に合わせ、24年度から教科書がSunshineに変わった。Sunshineの魅力の1つは1年生の教科書の巻末に基本的な動詞を学ぶためのアクションカードがついていることである。36枚のアクションカードには表に楽しい絵が描かれ、裏には自己表現に必要な動詞がよく使われる目的語と組み合わせて書かれている。主に中学校での英語の学習の入門期に使用することを目的に作られているのだが、小学校6年生でも十分できるのではないかと考えた。幸いに開隆堂から4枚1組×40セットと「指導用アクションカード」36枚1セットで2,300円という手ごろな値段で別売りすると聞き、校区内の小学校6年生のクラス分を購入し、小学校の先生方に利用してもらおうようお願いした。使い方については中学校でアクションカードを使った授業を参観してもらい、無理のない形で指導してもらったことにした。

そして、4月に小学校でアクションカードを使って英語の勉強してきた生徒が入学してきた。最初の授業で早速アクションカードを使った活動を行った。ペアになり、教師が読んだ英文を聞いて、机の上に置いたカードの中から正しいカードを指で押さえるという単純な活動である。しかし生徒たちは「このカード見たことある!」「先生の言っている英語わかる!」と叫びながら、喜んで活動に取り組んでいた。

今まで中学校最初の授業はどちらかというと、生徒たちは緊張して1時間授業を受けていたのだが、自分たちが小学校でも使っていた同じ教材を目にすることにより、スムーズに授業に入っていくことができたように思える。アクションカードが小学校と中学校の英語の学習の橋渡しをした形になる。中学校ではその後、夏休みが始まる前までの毎時間、授業の最初10分程度を使ってアクションカードを使った活動を行った。アクションカードを使った活動のよいところは、何よりも楽しいこと、少々英語が苦手な生徒も含めてどんな生徒も参加できること、そして何よりも音とジェスチャーで自己表現に必要な動詞句を身に付けることができることである。そしてClose your book. Put down your pencilなどのクラスルームイングリッシュも学ぶこともできる。

以下に小学校でのアクションカードの利用を含めた指導のステップをまとめてみる。

ステップ1

時期：小学校6年12月ごろ

「指導用アクションカード」を使って、絵を見てそれが表す動詞句の発音練習を行う。最終的には絵を見て、すべてのカードの動詞句が言えるようにする。

ステップ2

時期：小学校6年1月～中学校1年4月

二人ペアになり、机をくっつける。切り取っていないアクションカードを2枚2つの机の真ん中に置く。教師の「セット!」という指示で頭の上に手を置く。

教師が読む動詞句を聞いて、できるだけ速く正しい絵を人差し指で押さえる。教師は「指導用アクションカード」で答えを示す。お手つきをした生徒は1回休みになる。18の動詞句が終わるまで活動続け、相手よりも多く正しい絵を押さえた生徒が勝ちになる。引き分けの場合はジャンケンで勝敗を決める。負けた生徒は勝った生徒に敬意を表して拍手をすることにし、勝った生徒は「ドヤ顔」を見せることにすると、負けた生徒は悔しくてもう1回しようと教師にお願いしてくるようになる。時々ペアを変えるとさらに盛り上がる。

ステップ3

時期：中学校1年5月～夏休み前

教科書で学ぶ言語材料に合わせて、教師が読む英文を変える。たとえば、Program 3を学習している時期は、教師はDo you play baseball every day?と質問し、生徒はYes, I do. / No, I don't.と答えて絵を押さえることになる。中学校に入ってからアクションカードの使い方は同じ金沢市の泉洋美教諭が『英語教育』Vol.65-2号で詳しく書かれているのでそちらを参考にしていきたい。

3. 同じ色を使っての語順指導

中学校1年次で大事なのは英語の語順に慣れることだと考える。Sunshineには生徒が語順などを整理・理解できるように、所々に「英語のしくみ」というページがあり、既習の言語材料をまとめて復習するしくみになっている。そのページでは主語の部分には薄い緑色、動詞はピンク色、目的語は黄色、そして助動詞などは青色を使って表されている。色を使って英語の語順をわかりやすく理解させることが目的であると思われる。そこで、小学校で板書や単語のカードを使うときにも、同じ色を使ってもらい、小・中で同じ色で語順を学習するようにした。中学校に入ってから、生徒は色で語順を認識できて効果的である。

4. 中学生による小学生への絵本の読み聞かせ

小・中連携で大事なことの1つは中学校に入って英語の勉強を頑張りたいと小学生が思えるように小・中の教師が工夫することだと思う。そのために小学生に中学校に入って英語を勉強したらこんなことができるようになるというよいモデルを見せたいと考えた。そこで、中学2年生が小学校を訪問して6年生の前で英語の絵本の読み聞かせを行った。使用した絵本は、ドジだけれど、一生懸命頑張っている子豚が主人公のI Like Meという話と、ニンジンの種をまいて一生懸命水をあげ、最後には芽が出て大きなニンジンができるThe Carrot Seedという話である。中学生には、小学生に話の内容がわかるようにジェスチャーをつけて読み聞かせをするように指導した。また絵本が小さいのでページをスキャナーで読み込み、大きなスクリーンで見せながら読み聞かせをする工夫もした。12月に小学校の朝読書の時間に実施したが、読み聞かせのあとに小学生に書いてもらった感想を読むと、「英語はわからないところもあったが、中学生のジェスチャーや声の調子などで理解できた」「中学生が難しい英語をきれいな発音で読んでいてのを聞いて、自分も中学校に入学したら英語の勉強を頑張りたい」などと書いた児童がたくさんいて、中学校での英語の学習への動機付けとすることができたと思われる。

5. おわりに

以上、いくつか本校と校区内の小学校での小・中連携の取り組みを紹介してきた。『中学校学習指導要領解説 外国語編』(文部科学省 2008)の「指導計画の作成上の配慮事項」には「第1学年においては、実際に入学してくる生徒が在籍していた小学校において、どのような単語や表現を用いた活動が行われているかを把握することが求められる」(p.48)と記されている。アクションカードを使った活動は、その意味でも小・中双方の教師にとって有効だと思う。

最後に中学校から提案した活動に理解を示し、協力していただいた小学校の先生方に感謝し、これからも連携して、児童・生徒の英語の力がつく小・中連携のあり方を考えていきたい。



私の授業実践

秋田県由利本荘市立本荘南中学校教諭 村上 雅美



1. はじめに

本校は、昨年度より県の拠点校・協力校授業改善プログラム事業「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組」の指定を受け、研究に取り組んでいます。英語科の研究主題「自ら発信できる生徒の育成～4技能を統合した活動を通して～」のもと、日ごろ実践していることの一部を紹介させていただきます。

2. 授業実践について

題材名

Program 6, Program 7, My Project 5
Toward My Future Dream — What I Have Learned from My Work Experience —

(1) 他教科との関連を図った単元構成

本校の2年生は、総合的な学習の時間の一環として、9月下旬に3日間の職場体験を実施しています。市内の事業所でさまざまな仕事を体験することで、働くことの意義や喜び、大変さなどを実感し、自分の将来についてじっくり考えるきっかけとなっています。

Sunshine 2のProgram 6, Program 7, My Project 5では職場体験、著名人の生き方や考え方を扱っており、自分の夢について発表することをねらいとしています。9月から11月にかけて、ちょうどこれらの単元を学習することもあり、生徒が職場体験をとおして学んだことや考えたこと、将来の夢や希望について自分のことばで表現できるようになる大きなチャンスであると考え、この3つの単元を大単元として再構成してみました。

(2) 授業の実際

Program 6の導入時に、大単元の学習の流れと最終ゴールを生徒に提示することで、生徒が毎時間の学習に目標と意欲を持って臨むことができる

ようにしました。自分が選んだ方法、自分のことばで将来の夢について発表するというゴールに向かって、いろいろな表現(語句や文構造)や他教科の学習で学んだ発表方法(技術科のプレゼン、国語科の新聞の書き方など)を活用しようとする主体的な取り組みが見られました。

クラスを8つの班に分け、発表方法(パワーポイント、スキット、ポスター、スピーチなど)を決定。その後、原稿を作成し、ALTのチェックとアドバイスを受けて完成させました。個人の発表のめあてを達成できるよう、十分な練習時間を確保しました。

発表会本番の流れは次のとおりです。

- ・教室に4つのブースを設け、前半に4つの班が発表。1回の発表時間を3分30秒とし、これを4回くり返す。ほかの4つの班は1班ずつブースを回って発表を聞き、感想や質問を英語で伝える(後半は役割を交代する)。
- ・最後に全体で振り返りとまとめをする。

3. 成果と課題

(1) 成果

発表の機会が各班4回ずつあったことで、聞き手の反応を意識して、より伝わりやすい発表になるよう工夫・改善して次の発表に臨むことができました。受信する側も、目的意識を持って、真剣なまなざしで聞くことができたり、生徒による主体的な学び合いが見られました。

(2) 課題

発表に対しての質問の内容に深まりがなかったことから、「聞く力」の伸長が課題であることがわかりました。理解したことについて自分の感想や考えを伝えたり、考えを深めるために質問したりする力を育成することができるよう、学習活動の工夫・改善に努めていきたいと考えています。



ユニバーサルデザインの英語授業を目指して

大阪府貝塚市立第二中学校指導教諭 山口 均



1. はじめに

公立中学校では、さまざまな学力層の生徒が一同に教室で学ぶ。それぞれの知能や学習スタイルは多様であり、かつ特別な支援が必要な生徒もいる。本校では全校的な取り組みとして、ユニバーサルデザインの視点を教室環境や全教科の授業に取り入れ、すべての層の生徒に有効な指導の工夫と改善を行っている。

2. 「授業八策」を学校の指針として

「時間、空間、仲間の3つの間を授業に生かそう」を合いことばに、以下の8項目を大切にしている。

1. 「座礼」で始まる授業
2. 「めあて」の提示で始める授業
3. 「3色チョーク」のある授業
4. 「はっきり、すっきり」教え込む授業
5. 「ペア・班学習」で学び合う授業
6. 「スパイラル」授業 + 「繰り返し」学習
7. 「ふりかえり」でまとめる授業
8. 「立礼」で終わる授業

本校では、大阪府の相对評価の入試制度にかかわらず、7年前から本格的に「目標に準拠した評価」の取り組みを行っている。「授業八策」はその一環である。授業開始時に、本時の「めあて」を「～ができる」的なわかりやすい表現を用いて提示し、授業の終わりには、授業態度、内容理解を各5段階で自己評価し、さらに文章で1時間を振り返るJournalを書かせている。チョークの色は3色に限定し、「めあて」につながる最重要事項は蛍光オレンジで、重要事項は蛍光グリーンで、一般事項は白で板書する。協同学習では、生活班と学習班を兼ねた班を基盤にしている。ペア活動では主にIntake Readingを中心に、重要文を意味理解、構文理解を伴ったリピーティングで練習、定着させる取り組みを継続している。また、4人班では、

協力してタスクに取り組む活動を行っている。たとえば、関係代名詞whoを用いて、有名人やキャラクターを当てるなどなぞの英文を、班で4文作り、それをクラスで発表して班対抗で競い合うなど、学習成果が形に現れる活動などである。

3. デジタル教科書とアナログ教材の併用

デジタル教科書の最大のメリットは、「今、どこをやっているのか」がだれにでもわかることであろう。教科書内容を大きなスクリーンに投影し、英文を音読に合わせてハイライトさせたり、絵やスクリプトを段階的に提示できるなど、まさしくユニバーサルデザイン的である。その効率によって生まれた時間をほかの活動に使うことにも役立つ。一方、履歴を残したいときや提示の仕方をさらに工夫したい場合は、昔ながらのアナログ的なPicture CardやFlash Cardが有効である。Picture Cardは紙芝居的な提示の仕方や、黒板に並べて提示することでストーリーを確認しやすい。Flash Cardは任意に順番を入れ替えたり、部分的に隠したり、さらには逆さにして提示したりするなど、さまざまなバリエーションをとることができ、授業のライブ感を高めるのに適している。

4. おわりに

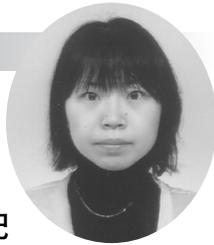
文法導入の場面では、「なぜそうなるのか?」という認知文法の知見を活用している。前置詞の意味概念や、冠詞と複数形の組み合わせによって意味内容がどのように違ってくるか、willとbe going toの違い等々、生徒と一緒に考え、実際に使う練習を心がけている。より深く文法を理解し、使える英語に近づけることはもとより、新たな興味・関心や柔軟な発想を引き出す試みを行っている。

教室で多様な生徒が学び合うことのメリットは、「新たな発見」が生まれ、人との「関わり力」が高まることであろう。今後も、ユニバーサルデザインの英語授業をさらに工夫改善していきたい。



想像力を豊かにする活動

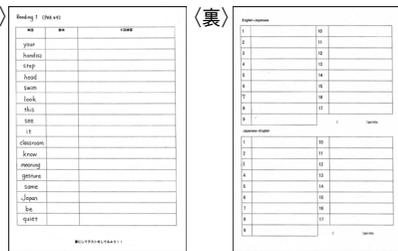
埼玉県朝霞市立朝霞第一中学校教諭 吉田 美紀



Sunshine 1のPOWER-UP Readingは、教科書の内容だけで終わりにするのはもったいない内容です。Reading 1「英語の掲示・標識など」やReading 2「想像しながら読んでみよう」は生徒の想像力を豊かにする材料がたくさんあります。本稿では、Reading 1の実践例とReading 2の実践例(予定)を紹介したいと思います。

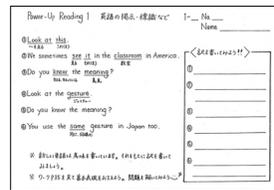
1. Reading 1 英語の掲示・標識など

POWER-UPのほかのシリーズでは、新出単語の意味が単語のとなりに表示してありますが、Readingには表示してありません。最初に新出単語の確認はせずに、設問を②まで終わらせませす。設問①、②はわからない単語があっても既習単語を思い出し、またhand, step, drinkなど日本語でもなじみの深い単語が出ているので生徒も意味を推測しやすかったと思います。それから以下のプリントを使って新出単語の意味の確認、練習を行います。(表)



単語練習のあと、設問③に移ります。長文を読むのがまだまだ苦手な生徒が多いのが現状ですが、新出単語の確認も済み、知っている単語も多く、「読んでみよう」という気持ちがわいてきた生徒が多かったです。

最後に次のプリントを使い、設問③の本文の精読をしました。精読をすることで、英語が苦手な生徒も安心して内容を確認することができたようです。



次に4人グループを作り、以下の「英語の看板を読もう!!」というプリントに取り組みせました。これは、同名の書籍より7問の問題を引用し、作成したものです。少し難しい内容や単語も入っていますが、教科書をとおして看板や標識に興味を持った生徒が多く、協力して取り組んでいたグル

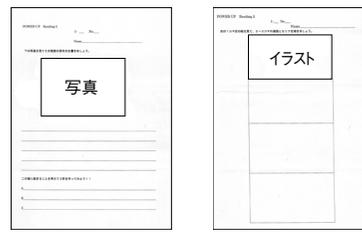
ープが多かったです。

また、知らない単語や既習単語の別の意味があることがわかった生徒の「へえ、そうなんだあ」という反応も大きく、「知らない単語でも推測して読んでみよう」という気持ちが見えました。



2. Reading 2 想像しながら読んでみよう

Reading 1と同じ流れで、設問②までを取り組ませ、新出単語の確認まで終わったら、生徒に設問と同じように問題を作らせる予定でいます。英作文の得意、不得意な生徒がいますので、以下のように①教科書同様の1枚の写真で5文ほどの英語を書かせて選択肢を作らせる、②4コマ漫画を作らせて最後の部分を空欄にする、の2パターンを作っておきます。生徒がそのプリントでの作業を終えたら、プリントを回収して混ぜて配付し、クラスの友だちが作った問題を読み、最後の部分を考えさせます。この活動によって教科書だけでなく友だちの英作文を読むことに加え、生徒が苦手と感じている英作文の機会を作ることができます。



3. おわりに

小学校外国語活動の影響か、担当している1年生のListening力は高い反面、文字への苦手意識を持っている生徒が多いため、ReadingとWritingの力は伸び悩んでいます。しかしSunshine 1のReadingの部分は生徒が興味・関心を持ちやすい内容が多く、教科書から発展して生徒にさまざまな機会を与えることができるので、私自身も楽しく教材研究をしています。

参考文献

小林 敏彦(2008)『英語の看板を読もう 見てわかるポキャビル』三修社



英語で英語を読む授業/英語リーディングテストの考え方と作り方

卯城 祐司 編著

『英語で英語を読む授業』-英語教師のバイブル

最先端の研究から検証してある前著の『英語リーディングの科学』を現場の教師目線でわかりやすくしたものが『英語で英語を読む授業』である。

本書は英語で授業を行ったことがない教師にも、英語による授業をより深めたい教師にもすぐに実践で使える有用な著書となっている。

初めて英語で授業を行おうとしている教師は、まず序章「英語で英語を読む授業」で日本語を介さず英語だけで文章を読むことが読解力を育成するのにいかに有用であるかを理解し、第2章に出てくる教室英語を授業に取り入れることから始めるとよいだろう。その後、第7章「実践編」を基にして1単元分の授業を実践することをおすすめする。中学校用の指導案2編と高等学校用の指導案2編が掲載されているので、勤務校に合ったものを選択することが可能だ。これらの指導案どおりに授業を行うと、言語活動を豊富に取り入れた授業を4~6時間続けることになる。このような授業を行い続けると、いかに生徒が活発に動き、自ら学ぶ姿勢を示すようになるか、実感することができるだろう。

英語で授業は行っているが、単調になってしまい、バラエティに欠けてしまうという教師には、第5章「内容を英語で理解する活動」および第6章「内容を理解した後の活動」を読んでいただきたい。内容を「理解する」活動と「理解した後」の活動の両者が示されているので、インプットされたものがいかにしてアウトプット活動につながるかイメージをつかむことができる。

近年、発展的な活動としてディベートが挙げられることが多いが、ディベートそのものを授業に導入するのはハードルが高い。その点、第6章にある「ディベートにつなげるクリティカル・リーディング」では「賛成・反対」の意見を求める質問例や、「理由」を考えさせる質問例を挙げ、教師の発問1つでクリティカルな視点をリーディングに取り入れる方法を示しており、実用的だ。

実践例を豊富に含み、かつ簡潔になぜそのような授業が有用であるのか理論も書かれている本書

は、英語教師全員に持っていてももらいたい1冊だ。
[A5判・216頁 定価 本体2,200円+税 発行:研究社]

『英語リーディングテストの考え方と作り方』-教科書を活用したテストのあり方を考える

リーディングのテストを作る際、「教科書で一度読んだ英文をテストに出すべきでない」と言われている。しかし、テストに出ないと知ったら、生徒は学習しなくなるのではないかと現場の教師は心配する。そんな教師の懸念に理論と実践の両面から答えてくれるのが『英語リーディングテストの考え方と作り方』である。

「読んで理解する力」は初見の文でしか測れないという。けれども私たち教師は定期考査で「読んで理解する力」も測りたいが、「本当に授業を理解できたのか」ということも確認したい。その2つの目標を達成するために、本書では「既読の英文」に「初見の英文」を付け加えてテストで使用する実践例や、教科書の原典などを使用してリーディングストラテジーを応用する力を測る出題例を紹介している。その他、本書には、リーディングの技能を測るさまざまな問題形式や作問例も記載されており、作問をする際の参考になる。

新学習指導要領を受け、私たちは授業に「読んだり聞いたりしたことを踏まえた言語活動」を取り入れなければならないのだが、そのような言語活動の評価方法がわからず、取り組みづらい現状がある。その点、本書にはRetellingやPresentationという産出活動を行った際に利用できる評価シート例があり、指導と評価の一体化が図りやすい。

本書に示されている、教科書の本文を活用したリーディングテストの作成例や評価シートを使った産出能力の評価は、実践ですぐに活用できるようになっている。そして、それらのテストの背景にある学術的理論とデータは、テストというものの奥深さを示しており、たいへん興味深い著書となっている。

[A5判・220頁 定価 本体2,200円+税 発行:研究社]
(東京都立両国高等学校・附属中学校 主任教諭 布村 奈緒子)

国際理解を深める指導

～高等学校教科書 ENGLISH NOW II から～

愛媛県立松山南高等学校砥部分校教諭 大川 光基



1. はじめに

昨年4月から新しい学習指導要領が実施され、高校では各学校の実状に応じて、さまざまな取り組みがなされている。インターネットやパソコンなどの普及により、ますます国際化が進み、個人レベルにおいても国際理解が重要なことは言うまでもないであろう。本稿では国際理解を深めるために私が取り組んできた実践例をとりあげ、そこから学んだことや課題を報告していきたい。

新しい学習指導要領には、指導目標として「文化理解」が明記され、教材選定の観点としては以下のように「国際理解」が明記されており、題材における国際理解の観点はたいへん重要になってくる。『高等学校学習指導要領解説 外国語編』(文部科学省 2008)の第4章の中の「第2節 内容の取扱いに当たっての配慮事項」には次の観点到留意するように書かれている。

(略)
 ウ 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。(太字筆者)
 (略)

配慮事項にあるように、国際協調の精神を養うには世界の文化の価値や多様性に気付かせ、人権や環境問題など、グローバルな問題を学ばせる題材が必要になってくる。

そこで、私が昨年度勤務した学校での授業実践の一部を報告する。教科書は開隆堂の ENGLISH NOW II である。

2. 教科書による実践

対象となる生徒の学力は英検4級から3級程度である。対象生徒は高校3年生の普通科15名で、事前に英語に関するアンケートを行ったが、大半の生徒は英語が好きではなく、どこか英語に対する苦手意識があった。ゆえに英語学習に対する動

機付けが必要であり、授業の中で食べ物や世界の国々などのなじみやすい内容のものについてピックアップカードを使用したり、欧米人について説明したりした。

国際理解を深める実践授業として、Lesson 11: Free the Childrenの本文の内容を約3時間かけて扱い、国際理解を深めるための授業を行った。ちょうど同じ時期にアメリカの小学生が銃殺された事件があったので、この事件を児童の人権と関連させて紹介した。このレッスンでは国際的に活躍するフリー・ザ・チルドレンの創設の経緯が述べられている。その概要は以下のとおりである。この組織の代表であるクレイグ・キールバーガーは新聞のマンガ欄でパキスタンの12歳の少年が親の借金を払うために過重な労働を強いられ、児童労働に反対する意見を述べたために殺害されたという記事を読み、子どものことは子どもで考えて助け合うという考えで、フリー・ザ・チルドレンを創設したというものである。

3. 実践結果と反省

2012年の12月11日、14日、18日の3時間を使い、高校3年生の普通科15名を対象に上記の教科書題材を用いた授業を実施した。初めに補助プリントで新出単語や重要な英文を学習させ、それから英文の意味を考えさせ、本文に関する情報を生徒に与えながら進めた。最後に本文に関する質問をして内容を確認し、アンケートを実施した。結果は以下のとおりであった。

アンケート5(とても) 4(少し) 3(どちらでもない) 2(あまり) 1(いいえ)
 Q1. この題材を読んで、児童労働から児童の人権を守ろうとする組織に興味がありましたか。
 5…3人(20%) 4…6人(40%) 3…3人(20%)
 2…3人(20%) 1…0人(0%)

Q2. この題材を学習して、さまざまな文化の理解が深まりましたか。
 5…3人(20%) 4…5人(33%) 3…5人(33%)
 2…2人(13%) 1…0人(0%)
 Q3. この題材を読んで国際理解が深まりましたか。
 5…3人(20%) 4…5人(33%) 3…5人(33%)
 2…2人(13%) 1…0人(0%)
 Q4. この題材を読んでもっと国際理解を深めたいと思いましたか。
 5…3人(20%) 4…6人(40%) 3…3人(20%)
 2…1人(7%) 1…2人(13%)

*小数点以下を四捨五入

Q1. から6割の生徒が児童の人権を守る組織に興味を持ったようである。2割の生徒はどちらでもなく、大半の生徒は何らかの興味を持ったようである。Q2. から約半数の生徒がこの題材の学習を通じて、文化の理解が深まったようであるが、約3割はどちらとも言えないという感想であった。Q3. については、約半数が国際理解が深まったようである。生徒にとって、児童労働については興味があるものの、その世界的な組織は知らないようであった。約3割がどちらでもないと答えたことからわかるように国際理解を深めるための学習が今後の課題である。Q4. では6割が肯定的な答えを示した。今回の実践によって半数以上が興味を持ち、もっと国際的なことを知りたいという気持ちになったことから、今後も生徒の意欲を高め、よりよい教材開発をする必要があるだろう。

生徒の感想や授業中の態度からわかったことは、貧しい国での児童の劣悪な状況を知ることにより、改めて日本での恵まれた環境に気付いた生徒がいたということである。やはり世界的な視点で物事を考えさせることが必要だと感じた。以下が生徒の感想である。

[生徒の感想]

- ・小さい子どもが働いていることを改めて知ることができました。でもかわいそうな気がしてなりません。
- ・日本では家がない人はそういません。ましてや子どもでは考えられませんでした。でも外国で

はそういう子どもたちがいるんだなと思い、悲しくなったのと同時に、自分がいかに恵まれているかを知ることができました。

- ・まず日本では考えられないことだと思いました。日本では貧しいからといって、人を売り買いすることは現在、ありえないことです。そんなことがふつうに起こっているということは、それだけ生活に苦しんでいて困っていることだと思いました。1日でも早く平和な世界になってほしいです。
- ・子どもたちのために今の大人がよりよい未来をつくってあげべきだと思った。

4. さらに国際理解を深めるために

昨年の4月から使用されている ENGLISH NOW English Communication I は題材が豊富で多様なテーマが扱われており、国際理解を深めるのに有益な教科書と言える。次の例では身近な日本語から国際理解を深めることが可能になっている。

- ①Lesson 5: *Kawaii*
- ②Lesson 9: *Mottainai*
- ③Reading 2: The Story of Wangari Maathai

①の内容は日本の有名な歌手グループやアニメの普及により、「カワイイ」ということばが世界に広まって、「カワイイ」という文化が世界の多くの人々にも浸透している例をあげている。キャラクター、弁当、日本の女子生徒の制服などをあげているのが興味深い。

②は「もったいない」ということばに含まれるいろいろな意味を説明し、ノーベル平和賞を受賞したマータイさんがこのことばに感動し、世界にこのことばを広めたことを述べている。

③はそのワンガリ・マータイさんがケニアで緑化運動を始めるようになった経緯を説明し、「もったいない」という日本語に共感をおぼえるようになった理由を読みとらせる物語になっている。また、環境破壊が世界じゅうで問題になっている現代において、国際的な視点で環境を守る大切さを指導することも可能であろう。

改革の波の中で

—中学校英語教師への提言—

2016年度学習指導要領改訂へ。外国語活動は小学校5年生から3年生に前倒しし、5,6年生は教科に格上げする。中学校の英語は英語で行うことを基本とする。

国も本気で国際的に活躍できる人材の育成を目指す気になったか。小・中連携も含め、今回の改訂は中学英語にかなりの変化をもたらしそうだ。

このような改革が真に実を結ぶかどうかは、偏に英語教師一人ひとりの授業改善への努力によるところが大きい。そこで、筆者なりに思う中学校英語の授業改善方をいくつか提言してみたい。

1. どんな生徒を育てたいのか

現在、英語の免許を持っていない小学校の教師が英語を使ってコミュニケーションを取ろうと必死に取り組み、児童らは英語の活動に親しみ、片言ながらの英語を身に付けて中学校に入ってくる。この流れをどう生かすか中学校教師の腕の見せ所である。

ところで、中学校で英語が壊れた生徒は、高校では修復が難しい。それほどまでに中学校の英語教育は重大であり、子どもに最大の影響力を持っていると感じている。であるから、本気で英語好きを育ててほしい。「これまで時間数が少なく、そこまで十分できなかったが、これからは見てほしい」という心強いことばも中学校教師から聞いた。教師が心から英語を楽しんで授業をすれば生徒も英語を好きになるだろう。「英語で授業を」もその1つだ。

英語は受験教科にすぎない、と割り切って高校へ入学してくる生徒が非常に多い。大学入試が終わったら、もう英語などおさらばだ。本当は、それから地球規模で生きる日本人としての英語コミュニケーション力へと発展していかなければならないのだが。彼らの心はもはや英語への情熱が再燃しないほどに冷え切っている。今こそ中・高英語教師は、自己の英語教育コンセプトをしっかりと問い直したい。

2. 生徒は生徒の中でこそ育つ

英語教育で人間を育てたい。そう考えると、教師対生徒という狭い考え方から、生徒一人ひとり

が生徒集団の中で育つという考え方に立った授業を展開したい。教師はあくまでもそのための仕掛けを用意し、活動を活性化し、評価し、刺激を与え、流れを適切に修正しつつ、ゴールへ導く。生徒たちは友人に教えてもらったり、教えたり、また、お互いの考えを英語で交換することで、英語学力も人間関係も極めて大きな伸びを見せる。現在の中学生は人間関係構築力が弱いと言われる。英語教育でもこのことを真剣に考えたい。「生徒どうしが中心(interdependent)へ」がこれからの方向ではないか。そこから生徒による、生徒どうしの気づきを導く指導も生まれる。それは学力の定着に最も大きな力を持つ。

3. 読みの指導は談話分析をしっかりと

中学校の授業を見ていて、気になるのが読解授業の流れだ。教材研究時の談話分析が甘いためか、長文の立体的な内容把握へと導けていない。トップダウンのアプローチで概略をつかませ、ボトムアップで教材回帰しながら英文そのものを大切に読み込む。パラグラフごとにトピックセンテンスをつかみ、パラグラフの関係を把握させる。vivid imageを描けているか、行間を読めているか、サマリーや読後の感想や意見が言えるのか等々にもっと腐心したい。「英語で授業を」も、その中で数々の手法が見えてくる。

4. 基本文法は使えるまで定着を見届けて

form-meaning-functionで押さえる文法指導がはやっている。英語のインプットで「使う場面」を印象的に導入し、三位一体で構文に迫っていく。だが、現実はそのだけではなかなか定着しない。そこで、帯学習を設定して、スパイラルに使用機会を増やす取り組みがなされている。さらに徹底したいものだ。高校から聞こえてくるのが、基礎文法の定着が悪いという声である。中学校教師への応援メッセージと受け取りたい。

(鹿児島純心女子短期大学教授 有馬 義秀)

投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。掲載号につきましては、原稿到着時に決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

- ① 22字詰×72行以内(本文分量)
- ② 二重投稿はご遠慮ください。
- ③ 採用分には薄謝を呈いたします。